

## ブラジル国サンパウロ州レジストロ植民地における 民具からみた日本移民の生活史の研究

期間：2019年4月1日～2022年3月31日  
〔代表者〕 福澤一興（レジストロ日伯文化協会）  
〔共同研究者〕  
清水ルーベンス武（レジストロ日伯文化協会）  
永井美穂（渋沢史料館）

脇岡明美（Instituto Federal de São Paulo - Câmpus  
Registro）  
吉村 竜（東京都立大学大学院人文科学研究科  
博士後期課程）  
泉水英計（日本常民文化研究所）

### レジストロ植民地、入植から50年の歴史を辿る、ゼロからの出発

研究代表者 福澤 一興



写真1 キロンボ（逃亡奴隷子孫の集落名）の住民の青空市場の様子



写真2 角笛——一般的ではないが、昼食時、午後の休み、作業終了を知らせるときに使用した笛

#### 【目的】

今年、入植107年を迎えるレジストロ植民地（旧イグアッペ植民地）は多くのブラジル日本移民植民地がサンパウロ州内の高原地帯に造成されたのに対し、州南部海岸沿いの低地帯（valeda Ribeira, 別名〈貧困溪谷〉）に造成され、他の植民地とは距離的に離れているという地理的条件をもっている。

本共同研究の第2年度を迎えた2020年は、第1年度に引き続き、日本移民の暮らしの変遷に関する調査をおこなった。その際に変遷を見る観測点として、入植直後、入植20年目、入植50年目の3つの時期を設定していた。それぞれの時期においてレジストロ入植者は当地の自然条件に生活を適合させ農業中心の生計をたてていた。このような農業中心の暮らしの変遷を明らかにするのが目的である。さらに、日本人入植者が当地の先住民とどのような関係を築き交流していたのかについても調査を進め、先住民の使用していた民具の中で入植者の暮らしに影響を与えた民具も調査対象にした。

### 【2020 年度研究活動報告】

2020 年度は初頭よりブラジルでもコロナウイルスの感染が拡大し、外出自粛令が発令されたため、本年度の主要な研究活動として予定していた、パラ州トメアスー植民地とサンパウロ州バストスといった遠方への調査出張は取り止めざるを得なかった。外出自粛令はまたレジストロ周辺現地調査を困難にし、とくに高齢者への聞き取りが不可能になったため、現場での民具調査も中止しなければならなかった。

このような予定外の事態のなかで、共同研究が以前より実施していた隔月のオンライン会議は情報・意見交換を継続してすすめられたという点でとりわけ有意義なものとなった。

現地調査計画のうち、レジストロ植民地内の道路の変遷と、入植者の移動および、転出に関する資料調査は実施することができた（担当・清水、脇岡、福澤）。

移民史料館に関しては、研究班全員のオンライン会議とは別に、担当者のみで毎月 2 回のオンライン会議を実施し、民具を含む収蔵物の受け入れ台帳の記入項目を充実させ、民具をその用途別に整理できるようにした。これにより史料館に現在は不足している種類の民具が明らかになり、今後、重点的に収集することで、資料館の利用価値が向上すると考える（担当・永井）。

入植者家屋の調査は、いわゆる第 2 期住宅の建築に取り入れられた、先住民住宅の工法に加え、入植後 20 年前後から建設され始めた第 3 期住宅の調査も実施する（担当・脇岡・福澤）。

他の日系植民地との比較によるレジストロ植民地の特徴の明確化については、調査出張による資料不足のため現時点で未定である（担当・福澤・脇岡）。

本共同研究がこれまで対象としたのは、ブラジル化した日本語を使用していた移民の第一世代である。やがてレジストロ植民地もポルトガル語が常用に変化した、これにつれて日系住民の暮らしがさらにどのように変遷を経ることになったのかは今後の課題としたい。



写真3 石臼——日本人の石屋が製造した臼で、多く見られる



写真4 丸山家の農機具小屋

### ■ 2020 年度の活動

- 隔月オンライン会議 2020年4月2日・6月4日・8月6日・10月1日・12月3日、2021年2月4日 福澤一興・清水ルーベンス武・脇岡明美・吉村竜・永井美穂・泉水英計
- 移民史料館民具整理・登録台帳作成に関するオンライン会議 5月26日・6月16日・7月9日・7月21日・8月4日・8月18日・9月8日・9月28日・11月3日・11月17日・12月15日、2021年1月5日・2月2日・2月23日・3月3日・3月23日 福澤一興・永井美穂